

うたそら

第
13
号

三周年!!

2023
March

3

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	03
テーマ詠欄「2」	18
一首評「そらよみ」	22
短歌リレーコラム「望遠鏡」	24
リレーエッセイ「いちごいちえ」	26
次回予告・編集後記	27

うたそら 第13号

発行：2023.03.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>

Twitter ハッシュタグ #うたそら

「うたそら」では Twitter での感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告

連作欄 8首の連作 自由詠
 テーマ詠欄「本」
 一首評「そらよみ」
 短歌リレーコラム「望遠鏡」
 リレーエッセイ「いちごいちえ」



短歌募集



第14号 '23 4/30(日) 24時

•8首の連作 自由詠 •テーマ詠「本」1首

第15号 '23 6/30(金) 24時

•8首の連作 自由詠 •テーマ詠「短」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集後記

すこしずつ春の気配が近づいてきた今日このごろ、皆さまいかがお過ごしでしょうか。寒かったりあたたかかったりと気温の変化の激しい毎日ですが、風邪など引かれていませんか。花粉症の方にはつらい季節ですね。猫アレルギー持ちなのに猫とくらすしているわたしは、秋からずっとアレルギー症状に悩まされているおかげで、花粉症なのか猫アレルギーなのか、よくわからないまま春を迎えつつです。早く落ち着きますように……！
 次号は5月発行です。テーマ詠のお題は「本」。たくさんのおすてきな作品や一首評など、お待ちしております！

編集員 千原こはぎ

今号のうたそら 第13号

参加歌人様 80名

連作欄 58名

テーマ詠欄 65名

一首評 10名

ご寄稿いただきありがとうございます！

コラム 小泉夜雨さん

エッセイ 稲穂みのりさん



illustration: kohagi chihara

うたそら 第13号
 ご参加いただいたみなさん (五十音順)

- | | | | |
|-------|------------------|---------|-------------------|
| 青野佑季 | @book_aoinusyoku | 緒方燕柳 | @o_sakuramochi |
| あき | @akky301 | 小崎ひろ子 | @hibuhoiwani |
| あき子 | @ponko_san | 音平まど | @nandemonaihito |
| 斌 | @akirakogiku | 歌島孟 | @Sinn1990 |
| 麻倉ゆえ | @AsakuraYue | かうすまゐ | @inari_karasuna |
| 雨虎俊寛 | @amefurashi3107 | 瀬川井戸 | @kareido1111 |
| 有村桔梗 | @chattenoire_k | 北谷雪 | @kitaya_nisonmiso |
| 歩歩 | @subjperf | 碓 | |
| 井倉りつ | @ura_litiz | 君村類 | @kmmr_r09 |
| 石川順一 | @Hitler57 | 玖嶋さくろ | @sacuja_tanka |
| 一ノ瀬美郷 | @kimono_misato | くぼたむすぶ | @yutonocamera |
| 宇祖田都子 | @Shimnsyutu2020 | くろだたけし | @tkuro2016 |
| 大坪命樹 | @OotsuboMeiju | 小泉夜雨 | @kozumi_yau |
| | | 咲兵衛 | @zumitakeishi |
| | | 佐藤水魚 | @sathio_tanka |
| | | サン津軽がぶり | @sun_tsugaru_g |
| | | 汐射ハルカ | @cranberry_sawus |
| | | 鹿ヶ谷街庵 | @kasamabakuchi |
| | | 西鎮 | @xi_zhen_jwJT |
| | | 雀来豆 | @jacksbeans2 |
| | | 十条坂 | @10key333 |
| | | 初夏みどり | @shoka |
| | | 白石夜花 | @yohana_no_sekai |
| | | 寿司村マイク | @XHk5BNR4w1wJ8M |
| | | たえなかず | @suzusuzu2009 |
| | | 多香子 | |
| | | 高橋良 | @takahashi_ry5 |
| | | 田中りな | @Moimoi_ayaka |
| | | 田邊葉月 | @nazuki1815 |
| | | 千束 | @a_oneko |
| | | 千原こはぎ | @kohagi_tw |
| | | 月草俣津久 | @moon_grass12 |
| | | つちこて | |
| | | ともえ夕夏 | @croissant_hey_z |
| | | 中村成志 | @nakam8 |
| | | 奈瑠太 | @nalda_aa |
| | | 西淳子 | @jacky244Ray |
| | | 西村曜 | @smrakira |
| | | ね。 | @a_onkeo |
| | | 薄荷。 | @aieohimeco |
| | | ひなお | |
| | | 廣珍堂 | @hirochin_dos |
| | | 笛地静恵 | @ymcx6rjEzGwq |
| | | 福山桃歌 | @momoka_fukuyama |
| | | ふじはら | @Penguinjumping |
| | | 細川エリカ | @uwlvkasen |
| | | 真岡まな | @mao_or_mana |
| | | まゆけ | @mskpompomfuwa23 |
| | | 増子拓己 | @mashiko_takumi |
| | | 御糸ごち | @MEATSachi |
| | | 深影こー八 | @cotona_nikage |
| | | 衣木 | @nimi_4567 |
| | | 水也 | @m_ya_o |
| | | 宮岡りょう | @myao_rr |
| | | 深山睦美 | @5757_77575 |
| | | 宮本響 | @11io_kami |
| | | 虫武一俊 | @mushtake |
| | | 六浦筆の助 | @Tohakumutun5057 |
| | | 村田一広 | @mucc12022 |
| | | 森内詩紋 | @Njg40Ev5gJcRpU |
| | | 杜野詩季 | @4kitanka55 |
| | | 悠佳里 | @yujari_rto |
| | | 湯島はじめ | @hajime_yu11 |
| | | 龍翔 | @oppizuntsuan |
| | | 臙 | @rou_tanka |
| | | 和田晴美 | @hrm143ponta |

計 80名

たくさんのお参加ありがとうございます！

13

リレーエッセイ

いちいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

語り部

テーマ

書き手

稲穂みのり

『源氏物語』研究の著名な研究者のひとりである玉上琢弥氏の論文のひとつに『源氏物語』音読論」というものがある。曰く、『源氏物語』は読むものではなく、姫君に女房が読み聞かせるもので、姫君は朗読される「物語」を聞きながら、絵物語を見ることによって『源氏物語』を享受していた、という。この論については賛否両論あり、結局「絶対にそう」とは断言できないのであるが、もし本当であれば、姫君は読み手の女房の声色・抑揚によって演出される『源氏物語』を享受していたことになる。光源氏は当代きつ

夜空から一つの星を選びだしてきみの話を聞かせてほしい



稲穂みのり

てのプレイボーイであるが、読み聞かせをする女房が彼について嫌悪感を示すような演出をすれば、姫君も光源氏について良い印象を持たないだろうし、反対に光源氏に憧れる女房が好感を持って演出すれば、姫君は光源氏について良い印象を持つかもしれない。

この論について考えるとき、幼少期のことを思い出す。聞けば、わたしは読み聞かせが大好きな少女だったらしい。家にあるありとあらゆる絵本を母のところを持って行っては「読んで！」とお願ひしていたそう。当の本人（わたしのことだ）は、もうそんな昔のことは忘れてしまっていて、絵本に関して唯一覚えているのは『ヘンゼルとグレーテル』の絵本に出てくるお菓子の家がとても好きだったことだけなのだが、善悪のはっきりしている物語では、母の読む善悪をそのまま享受していただろうし、不遇な目に合う主人公を、母の読む憐憫さで受け止めていたはずである。

当たり前だが、どんな作品にも作者・表現者の意図がある。ただ、作品完成後にその作品が

作者のもとを離れ、鑑賞者のもとに行く、その作品が意図どおりに受け止められるかどうかは分からない。鑑賞者の経験や、考え、価値観によって作品は鑑賞され、読み解かれていく。もちろん作者の意図どおりに読まれることもあるだろうし、少し違った解釈を施されるかもしれない。

大人になった今現在のわたしは短歌を詠んでいる。短歌を詠んでいると、自分の作品が自分の意図とは違った解釈をされることがある。そのとき、わたしが心がけていることは、うんともすんとも言わないことだ。わたしの短歌が、読む人読む人それぞれに異なった解釈を、景色を、記憶を、思いを呼び起こす嬉しさを噛みしめつつ、それを黙って見るだけである。わたしのもとを離れた短歌が、だれかの声でなぞられ、だれかの経験を伴った新しいものとして生まれなおすのを見るのが好きだ。

これから生む歌に、内包される無数の物語を、楽しみにしつつ作歌を続けていきたいと思う。

春でいようよ

青野佑季

今吹いた風は春風にしよう私たちだけ春でいようよ
二曲目にバラード持つてくるあたりいいよね君は目を閉じて言う
埋めれば海の匂いがする鎖骨私もいつか海になりたい
眩しくて閉じれば瞼の裏でも光った曳船する恋人
このふたりそのふたりあふたり私たちただ幸せにいましようね
午後五時が明るいのが嬉しくてほんとうに電話したくなったの
糸を切ることが出来ない糸切り歯君のだって丸くて可愛い
ただ春は美化がすぐくてぜつぼうは闇だつてこと忘れたくない

098

あき子



連作欄

8首の連作

自由詠

#うたそう

すぎだよ、と言ってほしいかわからない かなしみ込みでうつくしい海
届いても届かなくても唯一の手ざわりとして吹きぬけていく
あのときよくわからないけど泣いた予知夢みたいなことだと思っ
動じないちからが欲しいうつくしいだけでは青く澄み渡れない
季節より先にゆこうとする身体 魔法みたいに内からほどく
あなたから贈られているギフトだとわかるまっすぐ受けとめる風
はぐれたとしてもいつかは交わつてそのようにして出会うのでしょ
うねえわたしこまできたよことしか言えないような語彙力だけ

事案番号022

雨虎俊寛

食堂に鳴り渡るカノン 飲みかけのコーヒータちの湯気を残して
交差点進入のとき助手席のベタ踏みモーターサイレンが啼く
停止してくれる車両へ敬礼し吹雪く六叉路右折れてゆく
キャビンのなか四つの黒い塊の見つめる空に黒煙が立つ
無線から高所カメラで黒煙を確認の報 現認している
「ハジメテは俺もビビった」たゆんでる隣の彼の顎紐しめる
「燃えている家は他人の家だから」キャビンで我ら嘯きながら
薄雪はまだ踏まれずに側道の消火栓の蓋ここにあるはず

ドロップキック

有村桔梗

幾度めの転生だらう 風花がしんと川面に吸ひこまれゆく
冬空にしづかに息を吐き出せば半透明のさみしさになる
はるばるとわたくしの眼の奥にまでちやんと届いてます冬銀河
ぎんいろの脚立にのぼり白鳥の去りゆく空へ手をのぼしたり
耳もとにないしよのはなしをするやうに近づいてくる春のけはひは
ミッフィーは一羽と数へあげられてすこしさみしいかほをしてゐる
たいせつにしまはれてゐたハリボーの賞味期限がひっそり切れる
うつくしきドロップキックを受け止めて倒れゆきたし春の野原へ

「いつか」の話

井倉りつ

おなじだけ想い合うことのむずかしき 来てくれたことがすべてのすべて
丸いのかそうでもないのかわからないぼやけた月の下の曖昧
あるものもないものもほしいものも違うふたりで入るブラックボックス
軟骨にニードルぶつと音がする 引き返せない道がほしくて
決意とか覚悟とかわかんないんでしょあなたはなにも知らなくていい
ハイヒールぶらさげてゆく外廊下 メビウス一本ぶんの冬夜よ
おたがいの煙吸いこんで「さんむ！」って笑ってこのまま逃げていけたら
またねって言わなかったな てのひらの温度はおなじくらいだったし

家の中

石川順一

葛湯飲む生姜湯飲むは立春を過ぎてからやる手袋が要る
熱心にやれば脱力感が来る河原の石に蜘蛛がうごめく
小魚は石を投げられ逃げて行く尉鷗や笹鳴き虫のワールド
一冊を借りる一冊返さねばナポリタン食べ蓮根を食べ
ゴム製のゴミじゃないぞが落ちて居るトイレの中に春の気が満ち
椋鳥を久し振りに見て家の中自分以外に誰も居ないな
白梅が控えめに咲き図書館の帰りに農夫が尻を向け居り
歴史的仮名遣いには魅了されされど現代仮名遣いも良し

持たせやすくして便利だとつくづく考えます。

月よりも夜に詳しくならないで蜜柑は三つめ
から捨ててって 御殿山みなみ

返ってきた歌がこちらです。わたしが詠んだ
「夜」が摘まれているのでそれ以外の単語から選
びます。となると、月／詳しく／なら／ない／
蜜柑／三つ／捨て、ざっくりわけるとこんな感
じでしょうか。
月なくと、まず思いました。皆さんも思いま
すよね、月、海、雨は歌人三大使いたいワード
ですよ。あとやたらひからせる。そんなこと
はないか。ただ今回はまた夜の景になってしま
うのでパスしました。

蜜柑にしようかな。冬になるとずっと食べて
いるくらい好物なので、なんとかして魅力を引
き出したいところですが、上手いかな。

ところで後から御殿山さんに、なんで蜜柑な
の？ と聞いたら、丸ければ林檎とかでもよかつ
たと言われました。確かに、林檎より蜜柑の方が
捨てそうな感じはします。ダメになりやすいし。
「月よりも夜に詳しくならないで」という表現
が良いと思いました。呼びかけなので相手がい
て、その人が具体的な一つよりも抽象的で幅広い
ものに詳しくなってしまう、その得体のしれな
さ。自分では分からないものを分かるようになっ
た(なってしまう)人を、どこか遠く感じてい
るようで切実です。下句の関連性は読み取りが

難しいですが、「三つめ」なので両手で余るもの
は持ち切れない、とでもいう感じにも思えます。
こんな風に相手の歌を鑑賞しながら詠めるのも、
いちごつみの醍醐味です。閑話休題。

かたじけなしという顔をして冬を越す蜜柑ひ
とふさ含ませながら 小泉夜雨

蜜柑が口に入っている瞬間がとても幸せなの
でこんな歌になりました。柑橘系を噛むときは特
にもぎゅもぎゅ味わっている感じがして、一房
ずつ生んでくれた自然と生産者さんマジ感謝っ
てなります。

普段自解(を含めた語り)をしないのですが、
こうして作った歌の話をすると、いかに自分の
思考が愚かしいかはつきりわかるな。

こぼしたら汚い言葉なのだから冬の蛇口の
身のように 御殿山みなみ

(汚い言葉だから)留めておこう、ということ
だと思いました。蛇口はキュッと締めるイメー
ジが際立ちますし、「冬」ということなので凍り
つく印象もあります。二重に静止している様が、
飲み込んだ言葉の冷たさを表しているようです。
汚い／言葉／蛇口／中身、が目についたので
ここから選びますが、難しい。なんとなく、ど
の単語も単体で見たとときにぱっとイメージが浮
かぶものがないと思えました。自分と人が選ぶ

語彙にもだいぶ違いがあるもんだなど、こうい
うときによく実感します。

さてどうしよう……と思いつつ放置して仕事
をしていたら、たまたま職場の人と蛇口トーク
(蛇口トーク?) になったので、それで歌ができ
ました。職場の人、その節はありがとうございました。

蛇口から出てきてほしいあれこれをずっと言
い合う日々でありたい 小泉夜雨

蛇口から何が出てきたら嬉しいかという空想
は、数えられないほどしてきたものですが、人
によって好きなものが違うことが面白く、今で
もついで、色んな人に聞いてしまします。その楽
しさが出せたらなと作った歌です。

冒頭で触れたように、創作は生活や人との関わ
りによって生まれてくることもあると思います。
少なくともわたしは。そういう意味で、短歌は
日記や私信に近いのかもしれないと思います。

もしかしたら、自分にとっての残しておきた
い、忘れたくない、伝えたい、が明確になれば
なるほどわたしにとっての「短歌になる」なの
ではないか。そしてその種は日々、あらゆる場所
に眠っているのではないか。そう思ったら、些
細なこともより面白がれそうで嬉しくなってい
きました。

もうすぐ春、楽しい思い出も短歌もわくわく
作っていききたいものです。

短歌リレーコラム

望遠鏡 13

短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ

今号のテーマと書き手さんは…

書き手

小泉夜雨

テーマ

「短歌になる」とは

短歌をしていると、日々の暮らしのなかでこれ短歌になるな……って考えること、ありませんか。日常のなかで起こるあらゆる人や物との関わり、見た（または幻視した）風景の鮮やかさ、心が動いた一瞬の出来事があり、それらの取捨選択の果てにきらめく砂金のごと詩が生まれている。短歌に限らず文芸全般に言えることではあります。それがたとえ実景でなくとも、いつか自分が見た、感じたことが少なからず反映されているのは間違いないでしょう。

でも、短歌になるってどういうことなんだろう。作歌の過程で何を考えているんだろう。わたしは歌を詠みはじめて、今年でたぶん七年ちよつと。最近ふと、そういう回路が気になっていたの

で、完全な興味でこの文章を書いています。これを読んでくれた方もご自身の歌の作り方を教えてくださったら嬉しいですよ。

今回は千原こはぎさんにちなんで「いちごつみ」をしながら、自分の思考を整理する形で進めていきます。お相手は御殿山みなみさんにお願ひしました。ありがとうございます。なお先攻は御殿山さん、後攻はわたしです。

新品の上着が雨をばちばちに弾いている 傘は古くつてだめ 御殿山みなみ

ご存知の方が多くかと思いますが、いちごつみとは相手の歌から「一語」を「摘む」、つまり品詞分解をしたなかの一単語を使って自分の歌を返す、いわば短歌のキャッチボールです。助詞を摘まない、文法的な変更はしない、などルールがありますが、普段自分では使わないような言葉を楽しく料理できる、とても愉快な遊びです。

さて、先ほどの歌から助詞以外の単語を抜き出すと、新品／上着／雨／ばちばち／弾い／傘／古く／だめ となりますので、この中から選んでいきます。思ったこととしては、

- ・雨、傘はパス。どちらを使ってももう片方が付いてきそう、詠まれてる景と同じような歌になるかも。新品、古くも何となく同じ理由で使わないな。
- ・弾いは文法的に使いくてパスだな。
- ・ばちばちは自分ではこなれた使い方ができなそ

う。一旦ステイ。

- ・上着は歌内の季節が限定できそうでありだな。
- ・だめは歌にしやすそうかな。だめになる、だめだった、だめで元々、どうしてもだめ……うーん、ピンとこない。

- ・上着 よく考えたら自分で言うときはコートとかジャケット、カーディガンみたいに種類を使い分けているから、若干大雑把な言葉かも。

といったところでした。選別はできたものの歌にするまで難航していますね。書き出して客観視しているとなんか面白くなってきました。いや、面白がってても埒があきません。そろそろ決めなくては。一度ステイした語に戻ります。

ばちばち……ひらがなか。「バチバチに決まる」「バチバチにやる」「みたいな使い方は一時期よく見かけたけど、表記はカタカナだから変えられない。それ以外の使い方やってみるか。ばちばち。うん、なんか夏っぽい。最近寒いし、気分だけでも夏にしよう。歌はこういうことができるからいいですね。

きみのいた夜は短くばちばちと照らされたことだけ忘れぬ 小泉夜雨

素直に手持ち火花を考えながら詠みました。「ばちばち」は火花を連想することが多く、体感時間が短い語だと捉えたので、思い出としてはぎゅつと詰まっついそうだなと思い、こうなりました。オノマトペは共通意識を引き出しやすく、実感を

欠けてゆくだけの月

一ノ瀬美郷

道端のエロ本と椿 シャッター街 ここでわたしは息をしている
キスだけを繰り返しては見つめ合うこの恋は欠けてゆくだけの月
いきがって服で言葉で飾っても脱げばみな同じ肉体でしょう
使われて捨てられるわたしの体アドトラックの蛍光ピンク
さよならの儀式あなたの優しさにもう頼らずに生きてゆきます
もうしないと書いたのにまたきみは来て繰り返し振り出しに戻って
存在の軽さ場末の魚屋の隅に置かれた干物のごとく
遠くなるあなたの記憶明日なんて来ないでほしいから眠らない

屋上猿部 13

宇祖田都子

針金の動く歩道を避けてゆくのかつぱらぼうの卒業証書
風沈むダムに起立と着席を投げ棄てにゆく夕焼け小焼け
手摺から舟を押し出す匙加減人差し指の指紋がきれい
繭吊るすブーケとともに落下したベットボトルは夢の防人
長閑な犀桜の古いサブスクはひょうたん池に沈んだ迷路
金髪の教師が花嫁衣裳着てキングの馬を慰める意図
蟻の巣に「元気ですか」と呼び掛ける薄墨色の廊下は満ちて
はりぼての卵をなくし角笛が吹けるふりしたさよならの後

空閨の冬

大坪命樹

怒りしを独りが褥にくやみをる なほ再びに怒鳴るまじとぞ
部屋飾るきみの写真におもほえり 愛しき妹と添ひし喜び
幻聴のいとみじきはきみのわが傍になきことこそがゆゑなれ
郷のきみより届きたるチヨコレートされど侘しき独りが記念日
触れられざるきみの肌こそ恋しかれ スカイプ越しに乾杯すれども
きみ案ずるわが容顔の裏れたる 少食ならで寂しきゆゑかな
寂しきにほそれればなむ線人か 世を捨てしごときわれ思ひつつ
花咲くをり郷より帰るべききみよ 希望が蓄なほ膨らむかな

ダアリアの君へ

緒方燕柳

一斉に咲き誇る花卓上に貴女は愛を語る、好きだよ
別れてもまた逢えるからたくさんのダリアを買って君に贈るよ
一つひとつ主張しているそしてまた同時に調和している僕ら
君からのダリアの花束嬉しくて何度も何度も詠うよ僕は
美しき君の横顔誰からも批判させない強さがほしい
たくさんのダリアお風呂に浮かべては最後まで美しく在らせたい
誰よりも君が大切ダアリアのような笑顔で笑って、いつも
風のなかダリアの花束抱えては君の笑顔へ届けに行くよ

さくづきさくづ

小崎ひろ子

神さまが降る

かうすま

春によく似合ふお祭りあかるくて賛まつり桜の下に華やぐ
願はくば（誰が願ふか！）花の下飾られて馬に運ばる稚児
またひとつ悪魔を産んでさくらさくらまじらのかしらが呼ぶ虎落笛
おとしぶみひとつ拾ひぬ封緘のしるしのやうにはなびらを付す
梅の木に居た鶯は飛びたつて新たな花に尉鶴来つ
どこにでもある祭りゆゑ故郷ではなくいにしへを心は呪ふ
つぎつぎにまだ継がるのを辿りつつとりあへずきれいな桜を愛でる
イヤフォンか補聴器なのか髪の下になにかがあつて耳見えぬ人

遠淡海

歌島孟

遠いあこがれ

涸れ井戸

山裾へ入りゆく花は日輪に肖てはるかなる京丸牡丹
つきてみよ、尽きることない欲望にまかせて無間地獄の鐘を
願はくは奈落と暗い水底に生き長らえる龍へ、祈りを。
穏やかな風に、蘇鉄は月光を揺れる葉叢へ通らしめつつ
ものいはぬ母よりたまのあくがれて宿れる石へ手を合わせやる
海からの声と遠鳴りかぞへつつ、空よ、明日は何になるうか
片寄りに君へと萌ゆる葦は手を空の高みへ広げていたり
東征に踏みしだかれて、遠江の野は今まさに明けそむるころ

マルカフェははるか彼方で一生に一度行けたらいいと思う
ノルマ的事情で二日休日をゲット二月の第二週末
だめもとで遠い知人に声をかけマルカフェに行く機会を作る
六人で行くことになり死ぬまでに一度だけ幸運が舞い来る
大雪で山形新幹線運休テレビが連呼する金曜日
東海道新幹線は粛々と帝都に我が肉を運搬す
色合いの綺麗な料理続々と童宮城の太郎の気持ち
また来たいまた行きましよう好天の御嶽山駅前には神社

引っ越し蕎麦（引っ越しをする蕎麦。昨今、蕎麦は嫌な目に遭うと引っ越す。）

深山睦美

二句目以降の内容がシニールで好きです。Wikipediaによると、引っ越し蕎麦は「新しく引っ越してきた者が近隣に蕎麦を配る習慣」とのこと。最近「引っ越し先で蕎麦を食べること」だと勘違いする人もいます。これはまだ分かりません。「引っ越しをする蕎麦」という擬人化(?)は思い付きそうだなかなか思い付かない発想だなと思いました。「引っ越し（引っ越す）」と「蕎麦」で十八音も使う大胆さも良いですね。

一首評

西淳子

一首評

高橋良

一首評

杜野詩季

きらきらと薄き陽ざしにぬくむ猫冬の運河のほとりに眠る

小崎ひろ子

元彼や子のありなしを割愛し岩盤浴にならぶともだち

ふじはる

テーマ詠「温」。文法上、擬態語「きらきら」とは連用修飾語として「ぬくむ」にかかっている。それに加えて「眠る」にもかかる。いずれも「きらきら」とによって修飾されることで撞着語法のような効果が生じている。「ぬくむ（温む）」は、あたたまるという意味。「運河」という動きを思わせる具体により、猫が眠って見る夢や眠った猫の周囲で展開する物語を想像させる。句切れのないこともその流れを思わせる効果を助けている。

「やまびこ」に「つばさ」が生えてここからは全速力で向かう東京

六麻めれう

上りの山形新幹線「つばさ」は、福島駅で東北新幹線「やまびこ」と連結し、東京へ向かう。またミニ新幹線規格のつばさは、福島までは新幹線らしからぬ短い区間毎の停車を繰り返して県境を越える。鉄道詠として、列車の名称の扱いやその疾走感が見事であるだけでなく、初冬の旅を描いた連作を締めくくる一首として、ロードムービーのラストのような爽やかさが心地よい。

一首評

西鎮

一首評

田中りな

しんしんと雪に凍みる手赤鼻の「あったかいね」と握る君美し

月草俣津久

雪が降りしきる冷たい中で、鼻が赤くなって、手がかじかんでいる。ぬくもりを求めて冷たい手を握っている様子が美しいということを古語を用いて表現したところの言葉の調べが美しい。

一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

ゆるせなかつた記憶を三つ放したら小枝
にひっかかってうるさい

江口美由紀

何かを許せなかつた記憶。できればそんなものは捨ててしまつて新たな気持ちで暮らしたい。そこで作者はちよつとした決心をして、三つほど(三つも!)空に放つた。だが、どうしたことだろう、それらはすぐその小枝に引っかかっていろいろと自分ちよつつかいを出してくる。一度客観視したものがよりきやかに見えることを詠んでいるともとれる。表題歌には「ほどけたら戻れなくなる風の日のわたし」とあり、関連して読んだ。

一首評

小崎ひろ子

「くたびれたダウンが風に乗るところ、見ました。南を目指してました」
北谷雪
古い上着をぬいでゆく、と歌つたのは寺山修司だったか。春に向けてあらたな服をまとつた自分の姿を見せていきたいと思うのは万人の願いのようなものだろうか。この連作でも、作者は古い服との別れを静かに、そして丁寧に詠んでいてところに響く。引用したのは最後の一首。この歌だけ「が付けられていて、これは擬人化の歌ですよ、心象世界の歌ですよと見せようとしている。でもね、ほんとうはこの光景、実際に見たんでしょう?」

一首評

雀來豆

人形の夢は絶えなく月明かり差し込むだけのつめたい部屋に
水也
人形は夢を見ない。あたりまえのことのはずなのになぜか人形も人間と同じように夢を見て、ものを考えているような気がしてしまう。ひんやりとした夜の部屋で人形だけが夢をみつづけているときにだけ、主体はもしかしたら心安らかに眠れるのかもしれない。
連作全体が失われてしまったものを惜しむ切なさど静けさに満ちていて、すてきでした。

一首評

千束

独身という表現は不適切なので遠慮の塊と呼ぶ

深山睦美

重いテーマで綴られた連作の七首目。一首だけ抜き出し鑑賞する。分らない単語も、敢えて検索しない。「退院後」という非日常な環境で作るスープ。滋養に富んだ野菜を細かく刻んだ、胃腸にやさしい食べ物を、父(ここでは普段家事に携わらない家長的存在として読んだ)が作る。
個人名が由来していると思われる「ジュリアンヌスープ」の響きが素晴らしい。一首に凝縮されたドラマ性を、一層引き立てている。

一首評

中村成志

アン・ハサウェイ(仮)

北谷雪

地蔵

くらだけし

めずらしく定刻に来てミニバスはよたよたと去るわたしを置いて遅刻かもそして春かも駆けながらさつき見たのはメジロじゃないか? ビール缶レモンサワー缶はみ出した昨夜が居座る中野のベンチ階段をゆっくり昇る右ばかり割れた誰かの踵を愛でる
ホームから生えた駅長が唐突に腕を生やして動かす電車
踊ろうと思えば踊れるパンプスでひとまず今日も通勤している
二の足のリズムでメトロを降りていくどこにも行きたくない、ない、ない、ない
ドリップを40秒で出すカフェで Anne Hathaway に武装しな、ガール

(二次元の) アイドルも人間

君村類

かがやきの具体としてのきらきらのアイドルへ降るスポットライト
人生の辞書的な意味に追加するような前の観客のすすり泣き
飲む水が生ぬるくなる熱量で愛せる誰かを持つひとばかり
たましいの居場所を知っている目ですよ、とアイドルを切り取ったスクリーン
アイドルに偶像の意味があることをペンライトごと抱きしめている
見た夢のはなしを少しずつしているみたいにセトリリストのひかり
二次元の差の大きさを知ったとき踏みしめる雪がおそろしく硬い
人間は個性の枠に囲われて泥の中から咲き誇る蓮

お楽になさつて

小泉夜雨

それでいいと思つているのと言われ続けて幾星霜冬の善行
缶チューハイの広告が蔓延る渦中にあるときの終わりはかなり気持ちがいい
月すごいまじでけーとか送るたびあなたにここにいって欲しかった
たいそうなネタバレをくらつてもなお大河ドラマの高視聴率
追い出した記憶がいまだ耳奥を這いつくばっている音がする
そうだった、あちらは雨の国だからあなたに傘を持って行かせた
いつかこの日々が正解だったって嫌ってほどにわかるだろうか
意味のないものに意味を見出すことが得意 お楽になさつてください



猫の日

咲兵衛

猫の日と呼ばれるようになってから誕生日には猫の心地す
 猫の日の二十二時二〇分生まれ「惜しい、あと二分！」とよく言われおり
 ラフォーレがにゃふおーれとなる猫の日の翌日にあり令和の天誕
 天誕の祝日明けの名もなき日 軍事侵攻始まりにけり
 とある日に猫であるのと同じこと今日は誰かで明日はわたしで
 「いちぬけた」「にーぬけた」時を計りかね残され組は片付けをする
 再会の群れから堪らずいなくなる「いちぬけた」という宣言無しに
 路地裏にひと息ついてお茶を飲む塀渡りゆく猫消えるまで

花

佐藤水魚

ハレとケと喪を平らかに受け止める花舗に並んだ百合のあかるさ
 すべて終わりに思った方がたやすく各駅停車の銀色の夢
 礫にされたブーケはクリムトの女のようにほほえむばかり
 新春のいけにえとして松の葉は袋の中であおあお尖る
 大人というみなしごであるわたくしのふとももに沿うけものの温度
 紫を帯びた花びらかなしくつめたい水のバケツに放つ
 この生はあなたと出会いつか見た遠い花野に着くまでの旅
 泣きそうな息をしている花束を浅い睡りの只中に抱く

沼の底から

サン津軽がぶり

光を飲み込む私たち胸焼け息切れこそ幸せの証
 誰かを夢中にさせる才能がどの人も一つあれば良いのに
 私の生きる糧は埋められない溝とか超えられない壁にある
 女たちは汚されたいのかあなたのおぬかるみに喜んで沈む
 彼を覆う殻は厚くもはや誰も愛すは幻の姿
 そんな大した人なんかじゃないなんて皮剥きしてくる奴は敵
 好きだけど常にある程度は嫌いあなたをずっと好きでいるため
 捨てる物ほとんど有料アイテムで吐きそうになる賢者タイム

しだいに春

汐射ハルカ

雁行は鋭くそらを切り裂いていつもの冬に還って行くよ
 ひとひらの雪と雪とが連なって街をうずめるすべてを隠す
 劣化するからだところは喪失は空しいけれど悲しいけれど
 夜な夜なを彩るアセロラ・ストゼロのきょうのストロ―葎草の茎
 ハンドルを斜に構えてアクセルをくわえ煙草の横顔がすき
 しおさいと浜辺を照らす月の道ふたりの行方重ねる潮路
 中心を波打つ脈動はまぐりは目を瞑ります覚られぬよう
 あの一とつひとつの言葉さえわたしの胸に降り積もりゆく

あかちゃんとながすが犬の字になって寝ている ふたり来て伏になる ◆ 御糸さち
 最後から二番目の人が死ぬときの地球さいごのおやすみなさい ◆ 深影コトハ
 なにもかも迷わず2人分け合って互いに生きてゆく早春賦 ◆ 衣未
 天井にならべたふたつ星のかたちをしていたねまだ泣いている ◆ 水也
 空色に変わる信号見届けて銀河鉄道おとな2枚で ◆ 宮岡りょう
 「2番線、春が来ます」と叫んでる男がすでに乗っている春 ◆ 深山睦美
 カラオケで歌うごとくに友と吾と「あずさ2号」で信濃路？夢か！ ◆ 六浦筆の助
 ロールケーキ切り分けてゆく君の幅は僕の幅より二ミリは太い ◆ 村田一広
 君と僕 立って一畳寝て二畳 何も持たない豊かなくらし ◆ 森内詩紋
 とつとつと話をすれば深海の真珠を探す心地の二人 ◆ 杜野詩季
 抱いたままではいられずに夜明けまえ第二王子は鳥を逃した ◆ 湯島はじめ
 掛け持ちでコンビを組んであるきみをこひびとと呼ぶことはできない ◆ 龍翔
 纏足をされた言葉が泣きだして二月の星乃珈琲にゐる ◆ 臙
 これきりと思ったりもするのだけれど再びを君に踏み出してみる ◆ 和田晴美

テーマ詠 「2」

交際し眺めた夜景愛誓う2人の夢を追いかけ続け

この街の二度目の春を吸い込んで歩幅ちいさく坂道をゆく

二人だけ残る職場の加湿器がじれったいなとまた息を吐く

この短いこのひと月にあつたこと思い出したくない二月尽

いつぺんになくなるパピコ二人だとしあはせの消費の速きこと

二の段を唱える唇に幼さのよみがえり来る深夜の弥生

大型で非常に可愛い犬2号、勢力を保ちわたしのもとへ

身長が少し足りなくて午後二時の書庫の光に手が届かない

二日はや元日の酔い覚めぬまま会社に出たる頃など浮かぶ

複雑は夢のままなりローカルの無人の駅に自動車止まる

意味のある偶然として《影の現象学》初版第二刷

さよならを言うには早い如月の卒業式に梅がほころぶ

数字の2になればはしないガチョウにも降る星うける翼のありて

夢注ぎ砂糖はみつつダージリンのセカンドフラッシュ飲み干そう

2番目の女と知ったあの夜の2度目は娼婦を演じた痛み

スーパーの値上げレースが止まらずにクイズダービーみたいな値札

「A」と「B」究極の二択迷うことなく第三の「C」と答える

◆ 田中りな

◆ 千原こはぎ

◆ 月草俣津久

◆ つちとて

◆ ともえ夕夏

◆ 中村成志

◆ 西淳子

◆ 薄荷。

◆ ひなお

◆ 廣珍堂

◆ 笛地静恵

◆ 福山桃歌

◆ ふじはる

◆ 細川エリカ

◆ 真岡まな

◆ まさけ

◆ 増子拓己

球根

鹿ヶ谷街庵

終わらないしりとりをする僕たちに春を知らない初雪が降る

流水が岸でくずれるさまをみる別ればなしのさなかにぼくは

体内の暗いみずうみ思うとき湖底に朽ちた舟のいくつか

淋しさの象徴みたいな赤飯のおにぎりを買う我がバースデー

「死にたい」がほぼ正解の夜でした なんの肉だよ、カップヌードル

いつやるか？来世でしょう、と笑いつつ春の光に死を待つところ

観覧車見上げて歩く夜の道 冬の果てっていつなんだろう

またひとを愛することはできるはずだけ眺めるだけの球根

漏斗係に聞いた話

雀来豆

僕がつく百もの嘘を千の眼で暴き出すきみ明るい夜だ

撃ていたずらに詩をあげつらうおっさんの形をしてる紙の標的バンバン

帰るのが惜しい奈良シネマの椅子の背のミッフィーの口のバツテン

神、まじまじと見つめるまじろがずに見るしめすへんには点のないこと

みなゆっくりと立ち上がるいつか映画館で暮らすことを夢見て

揚羽蝶あげくの果てに見失う写真のなかの血のような黒

俺俺とだけしか言わぬ人だけど騙しているのはいつもわたしだ

三月になればと書いた絵馬の字を隠してしまう閏日の雪

三月の海

西鎮

すこし右へ傾むく癖のある字まであなたと思ひ付箋紙を剥ぐ

感情の成層圏があるらしく 終電 それをつきぬけてゆく

河ならば左岸にあたる肌同士かさねて夜に灯した温度

背後から海を感じるやうにもう逢へないひとが襟もとに匂ふ

犬走りの玉砂利どこまでも白く直ぐに忘れてしまひたかつた

地域猫としてあなたに出会へればあんなにやさしくされたのですか

三月の海へはらはら降りてくる雪はすべてがあはき心中

春遠きひとりの部屋でこのところシロクマのやうに暮らしてゐます

花の汀に

十条坂

ほがらかに花いちもんめの残酷さ 最後はひとりですべて笑っていたい

窓辺には冬を宿した梅があり風の冷たい一日でした

小春日は春に訪れないことを知らないあなたかくれる飴玉

花のない花瓶を抱いたゆうべからエラーを吐いている送信欄

満開の花 花をよぶ夢 夢を枯らしてしまう春がくること

花びらをむしってしまうあなたには話していいことばかりある

おしるこの消えてしまった自販機はコーヒーばかりの春の燈台

他愛なく花の汀に白い手をうつわのように差し出すあなた

足跡をつけるはやきで丁寧に二月の路をゆく白い猫
 枯れた芝が広がりちよと四ヶ月あとに工事が始まる空き地
 だんだんと高くなるビル白猫の乳歯がつきつき並ぶ下あご
 開発の土産としての公園で鳩のくちばし奥にある闇
 遊歩道ベンチに触れて木は夏に伸び縮みすることを知らせる
 太陽系直列の日に彼方から猫のマズルが受信する波
 住民の置いた皿から倍数の舌で浚ったならんかの汁
 暗くなる街にひかりの白猫はゆっくり回りニタリと浮かぶ

ブルー・ペリオド

たえなかず

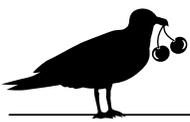
恋に似た実験的な段階を経てから春を待つ私たち
 在りし日の非常階段 会ってから逃げるかそれが問題だった
 早春の思い出と言う漠然としたモチーフに私はなろう
 過去なんてなくていいなあ、つぼみには 花瓶と未来と結末だけで
 そういえばそんな人とも付き合った あの時じゃ絶対振るから、かしこ。
 コンビニのスイーツあれこれ思い出す私やっばり恋多きひと
 また逢える・逢えない・たぶん逢いたくない天井の海老のけぞり静止
 旦那 死ぬ の検索ワードを削除して来世の恋ってどんなのだろう

わが町の白蛇伝説桜木の下をしずしずしゆく稚児行列
 せつかな河津桜はひと月も先に咲きだし伊豆はうるわし
 早咲きのウンナンソケイ花咲けば黄色のリボンほどけゆくよう
 弟のジャンパーの胸から猫が出るたまに鳩が出ることもある
 「かわいい顔してきついな」と陰口きかれる彼女は三毛猫
 ひき売りの八百屋の台に並ぶ鉢 ひなげしアネモネ春の匂いよ
 転んでもあざはいつしか消えてゆく泣き虫小僧に春風やさし
 フライには中濃ソースを少しかけ金曜の夜はビールを追加

新年頌

高橋良

近所なる寺に鳴る鐘の音を聞きて十一代目として年あらたまる
 寺の鐘の鳴りわたるなか子を抱き寝息と鐘の音を聞きをり
 胸の上に寝入らむとする嬰兒はわが上着なるフアスナーつかむ
 新たな年の始めの朝まだきみちのくの空に星は輝く
 朝まだき神社へ向かう坂道の融雪剤を車輪踏みゆく
 初詣すれば護符にて菓子くるる地域の神社に朝まだきゆく
 元旦に村社より蔵王嶺を望む雲より出づる陽を拝みけり
 若水を汲むに釣瓶のからからと鳴る音せしとふ向かひの本陣



- 2 回目のスラダン映画で泣いてしまいう来世もあなたに惚れると思う
- 君はまだそんなに注目されていないサッカー選手背番号2
- 二人以上いるので頼むときピザはこの世で一番わたしの味方
- 見過ごしてしまったことの淋しさに屈めば光る水仙ふたつ
- 腐ってごめん、その絶妙な距離感が心揺さぶる（ニコイチであれ！）
- 二階でも聞こえる母のモーツァルトだった遠くに春はたたずむ
- 命ふたつハートを映す共鏡われらスワンは2の形して
- 天使にはなれないけれどモンブランふたつを護るくらいには人
- 会議室2枚目めくる音ひびくあと何分で帰れるだろう
- ストリートビューで雪降る街をみた 二人で暮らすはずだった街
- ニダースの牡蠣をひらいてゆくひとの眼はブルターニュの海をたたえる
- 玄関で次女が話してくれました対卵戦争の顛末
- 二回目の人生だろうひと目見て君がきみだとわかる 春雷
- 二つ目の星が輝き出す頃にカレー風味ののろしが上がる
- 雨上がり黄昏染まる屋上で二人紡いだ恋物語
- 二回目の結婚と言うほの暗いおとぎ話を信じているの
- 二人目の子もあて迎ふる新たなる年の始めに村社に詣つ
- ◆ 氷谷雪
 - ◆ 砧
 - ◆ 君村類
 - ◆ 玖嶋さくら
 - ◆ くぼたむすぶ
 - ◆ 小泉夜雨
 - ◆ 咲兵衛
 - ◆ 佐藤水魚
 - ◆ 汐射ハルカ
 - ◆ 鹿ヶ谷街庵
 - ◆ 西鏡
 - ◆ 雀來豆
 - ◆ 十条坂
 - ◆ 初夏みどり
 - ◆ 白石夜花
 - ◆ たえなかず
 - ◆ 高橋良

テーマ詠「2」

二歳半 自我が芽生えた 君のそば 母音からなる 家族三人
うさぎLサイズ二体でちょうどいいって口コミを見てポチったの
恋なんて二人っきりのものなのに誰かが何か言ってるらしい
ポンプ車が遠のくときに告げてゆく鎮火したぞと二打の警鐘
こつそりと二重まぶたにしてみても見える世界は変はらなかつた
三日月の前日君は本当に雪にハートを描くのが上手い
十年を目指して二年目 あと何回だいつきらい！って叫ぶんだらう
一郎と二郎三郎決起して幕吏が来るぞ逃げろや逃げろ
手をつなぎふたり小鹿のようにゆく吊り橋揺れる、揺れる・・・
ふたつめのザトウクジラを埋め尽くしなお散り続く骨色の花
2つある魂額を突き合わせ猫と人とで日向ぼっこ
傘高く安きポンチョぞ二つ買ふ 寒さにかなひて雨路を楽しむ
図書館で二冊を借りて検索をウェブで続けて待つ締切日
決勝戦みたいに二つ咲きのこる薔薇十二月の冷たい夜に
いつまでも机に肌を押しあてて、交じり合わない二人なんだね。
二つ目の遊覧船を見送ってぼくらは鼓星を指差す
二月には知り合いがまた増えてゆき始めましてと言ひ合う酒房

◆ あき
◆ 斌
◆ 麻倉ゆえ
◆ 雨虎俊寛
◆ 有村桔梗
◆ 歩歩
◆ 井倉りつ
◆ 石川順一
◆ 一ノ瀬美郷
◆ 宇祖田都子
◆ ㄈ
◆ 大坪命樹
◆ 小崎ひろ子
◆ 音平まど
◆ 歌島孟
◆ かうすまあ
◆ 涸れ井戸

1000days

田邊葉月

「おかあさん、いいてんきだね」晴れ、曇り、雨、雪、毎日いい天気だね
せがまれるままに歌おう繋いだ手を離れた後も残りますよう
お買い物RTAまずここでバナナを一房持たせておきます
後ろからおうたが聞こえなくなって少し速度を落とす自転車
今日もまた小さな鏡がぬいぐるみを叱る「だからいったでしょー」
誰が誰を手伝っているのかあれもこれもやりたい2歳児のおてつだい
母からの手紙が遅れてやってくるあの日の貴女もこんな気持ちで
アンパンマンばかり覚えてたくちびるが米津玄師を思い出す夜

起き上がれない

千原こはぎ

そばにいないことのできない冬だけが横たわるから起き上がれない
あなたよりあなたがほしい逢えないでいるまに伸びた無精髭さえ
どうでもいけど話したいことがあるいつでもいいから話せないまま
執着をそろそろさねなくなっていてあっさりとする「おやすみ」の文字
眠ってたふりであなただを避けているやさしい泥に足を浸して
ぼんやりとせかいのすべてはあわくなりわたしはただ咳をするいきも
必要とされていなくて世界から片足がはみ出してしまつて
もやもやを目から流してあしたにはどうしようもなく笑顔でいたい

ゆきどけ水

月草俣津久

当たり前前みたいに漕いだ自転車を変速するたび歳を重ねる
バス停で間に合ふはずのバス逃し次に乗り込む君を待ってる
使へない切符や切手が好きなのは誰も見向きもしないからです
気づいたら大人になったでもたしか交差点には幽霊がある
酒に酔ひ視界が揺れるたび思ふ小学四年のインフルの冬
本好きなあなたはきつと似たかたちの板チョコだつて喜べるよね？
いたづらにただ過ぎ去つたこの日々がなんでこんなに愛ほしいんだ
風のなか春の匂ひを見つけたし心だけでも衣替へした

クラミツハ(三)「悩む」

ともえ夕夏

大急ぎで飾られてゆく万国旗を祖母に倣つて静かに眺む
村のひとが「あんたが雨をあげたんね？」と背中を叩きに来て照れくさい
弁当の玉子の甘さ、紅白の玉が飛び交う青空は、いい
がんばれ、と念じた 今年タツヒコがリレーのアンカーとして走る
「高校はどうするんね？」と龍神の顔で静かに母は尋ねる
手心えはないのだ理科も数学も雲も時雨の声も未だに
「龍神」と第三志望のその下に霞のごとく薄く書きたり
高校は遙かな町にしかなくてはじめてひとりをこわいと思う

王宮の間取り

中村成志

フラミンゴの子どもは土を這い進む乾期の湖に陽が昇る
 陽光よ両の脛へとしがみつくと小猿がほどの重さ気怠さ
 ヴィーナスが幹の内にて立ち眠る椋並木の冬枯れの朝
 石段に土鳩の声よ塗り剥げの鳥居は空を三つに割って
 行き暮れて岩へ座れば樹の黒さ星が次つぎ転ぶ尾根には
 ハイネケン、サツポロ、オリオン冬の夜をからから床へ散らせば西陽
 王宮の間取りを土に描き合う童のように金星と月
 かくて冬は終わりを告げる月光が霜降らすとも膝痛のどか

Coffee and Cigarettes

奈瑠太

珈琲と煙草のハーモニーをきく行間という贅を分け合う
 喫煙所ラジオプースのよう此処はコミュニケーションのおぼけの棲家
 今日課長、貧乏ゆすり倍テンで震度2越えてフロアを沸かす
 ボディーツニック甚だしいねトイレ行くふりしてブーン テイクオフする
 ストレスが見える形で吐き出されゆらゆら紫煙たなびいている
 ああ煙が目にしみるって泣けもするみんな笑って小突いてくれる
 いまさつきちよつと失恋したもんで、嘘かほんとか微妙なほんと
 コーヒーもわたしの瞳も波打って座礁してゆく煙の島へ

入がりん狂シゅガー

西淳子

地域猫みたいに地域人になりパイプカットの夢ばかりみる
 御明算！コンビニにある菓子パンのカロリーでするフラッシュ暗算
 コインランドリーの監視カメラにも僕の下着がちゃんと汚く
 カラオケで二番のときに一番を歌うみたいな社長出勤
 「教頭の顔を見ました？あの佐久間宣之さんに似てないんです」
 封筒で自慰する人にプレゼントした百均のファンシー文具
 ゆたんぼもたまにはえなじーどりんくをのみたかったとおもうんだよね
 自販機のボタンを押して自販機のチャンネル登録と高評価を！

きみを神さまにする

ね。

がらんどろ意志をあずけて生命線ごとあげるきみを神さまにする
 凱旋のいささか重く背負う欺瞞に降る雨に傘をさしかけ
 落雷のすさまじき光 とらわれて免責などと永遠にのぞまぬ
 愛なんてこんな簡単に簡単だったのに鳥かごに鳥を失うように
 歌を捨て瑠璃も時計も忘れ去り偲ぶ夜あるかナイチンゲール
 満ちたりぬ惑乱あふれくらぐらと劇場 ここが君の果てだと
 刹那だと衣装に指に念しても遊戯にもならぬ擬態だけの夜
 見出され忘れさられて朽ち果てた劇場に降るきみの呼ぶ声

不可逆

悠佳里

砂粒が容赦なく落ちる苦しくともきつと貴重な息子との日々
 「抱っこして」「母ちゃんやって」甘えては私の愛を確かめている
 両足に力を含めねば倒れそう小さかった君は18キロ
 「僕だつてできる」きつとそう思ってる兄のまねする君は1歳
 今日が好き昨日は嫌い複雑な兄の心と秋の空です
 兄心弟知らず遊んでよかまってくれよとペンペン叩く
 成長とは卒業すること母ちゃんと呼ぶことだとか三輪車とか
 大好きでも1人になりたくて上手くいかない母は修行中

仮飼育

臙

しんざうをざがりざがり縫つてゆくきみの言葉といふしつけ糸
 童巻はすべてを壊す わかるかい？いいこでぬたら仲良くできる
 伝へたい空はくづれてほんたうのわたしはしつけ糸にちぎれた
 よろこんでひざまづくことよろこびはしあはせなんかちやなかつたこと
 しつけ糸ゆるんでしまひさうになるきみがときどきくれる誠実
 本縫ひをする気はないと知つてゐるきみはいつでも手放すだらう
 ひとしづく残されてゐるコーヒートのやうな希望だ ぢきに干上がる
 しんざうに飽きないでゐてしつけ糸ざがりざがり自分で縫ふよ

エゴイスト

龍翔

レジ前で小銭を派手にぶちまけたきみの恥づかしさうなたんこぶ
 マンションの最上階の窓辺からバイトに向かふきみを見送る
 昼間からちあきなをおみを歌ふには鮮やかすぎる毛皮をまとふ
 柄にもなく浮かれてゐたり ヘアブラシをマイク代はりに歌ふわたしは
 ヴォーキングしながら街を闊歩するわたしをよせよと呼びなさい
 きみぢやなくお母さんに、と差し出した羊羹が重たさを増しゆく
 コーヒーが飲みたいといふきみのために椅子を一脚買ひ足したのに
 きみからは好きだと言つてくれなくてぼくには愛がよく分からない

スプリングエフェメラル

和田晴美

高級じゃない方の食パンを買い誰とも比べないよう生きる
 少し良い紅茶を淹れて朝毎に立ち上がれば良い私のからだ
 どこからか沈丁花の香り漂う夕闇の路地の奥たぶん春
 人の背に付きながらゆっくり歩く待つ事もまた希望なのだ
 強い風にもんな靡いてしまふけど実力主義というのと違う
 守れないものも残念ながらあるでも守りたい 沈丁花どこ？
 週明けの二月末日前日にこれまでの寒さとめて綴じる
 踏んでいるのも踏まれているのも私とおい痛みに日が差していく

バスは行くよ

六浦筆の助

満員でデイズニーランド入れずにバスは工場抜け「浦安」へ
足摺の岬を発ちしバスの中、脳にて「岬めぐり」がめぐる
まじろみし間にバスをやわらかな四万十川のみどりがおおう
夏の夜のEXP085を終えて混みあうシャトルバスは風琴
魯迅公園出る三月の「十八番公共汽車」に18の君
運賃表示巻き上げバスはのぼつてく眼下に千枚田を従えて
恋人らどこまで駆け落ちするのだろう 「卒業」ラストシーンのバスで
少年らゆくは荒野か絶景か「13号地」のバスに飛び乗り

黒猫をふんちやつた

村田一広

一口だけご飯を食べてすぐおやつホールケーキを堪能してる
大丈夫ですつて丸く広げてる両手のなかにジュース注いでも
なにげない日常の光に包まれてうつつすら浮かぶ過去の情景
モデルハウス毎日見ればまだ住んでゐないのに少々飽きてくる
真冬日の小犬のワルツ指先に滞り奔りだしてはくれず
黒猫の背中のような黒鍵を撫づれば聞こゆ猫ふんちやつた
打ちおろす鍵盤の側面に垣間見た木目もスタインウェイの顔
ゴルトベルク変奏曲をストリートピアノで弾くは髭の独逸人

春のゆび先

薄荷。

ささやかな余韻のような歌声で雨あたたかに景色にとける
水族館みたいぬれた窓の外レインレインと景色ゆらめく
ファミレスのいちごのパフェのひとつを聖なる食べものとしてあじわう
二杯目にあなたが選んだドリンクの泡が小さく弾けてきらきら
キャラメルのおまけみたいな毎日で世界は案外輝いている
安心を獲得している（あの人と同じリズムをきざむ心臓）
幸福は指のさきから伝わってやわらかな君の髪の手ざわり
リビングでうたた寝をするきみの手をそつと握れば春のゆび先

冬の日

ひなお

風寒き冬の日なりき街角の銀杏落ち葉の舞い上がり飛ぶ
加湿器のどこ光れるか真夜中に部屋全体がうつつら浮かび
池のにもつとと波たち走れるが何も見えねば風の悪戯
公園の鳩は地面にうずくまりみな太陽の方に向きおり
最上川眺める茂吉思いつつ狩野川土手に佇むわれは
一列に並び泳ぐ軽鴨の一羽はなれて我に寄りくる
うす暗き竹藪なれど先端は冬日を浴びて緑葉かがやく
一階より駆け上がり来し女房が雪だと言いて物を取りこむ

冒険の書①

森内詩紋

さあ、晴れた！はだれ雪野を越えて行け セーブポイントひよこ堂まで！
変わらない笑顔の店主に迎えられ「チキンカレーをお願いします」
疫病にかかり失業親父の死 思えばヒドイ半年だった
戦えば戦った分の経験値 リアルもそうならやってけるのに
コマンドは「たべる」と「はなす」何気ないことが明日への活力になる
デザートのスライムに負けそうになる 甘く冷たく続くダメージ
次来たら、なすチーズ焼きカレーだな 絶対バフがかかる味だろ
誰だって勇者なんだよ毎日生きぬいてきて今ここに在る

揺れて（参）

杜野詩季

漆黒の校庭の列皆が皆きれいですねと呟く星空
商店街の力なくした自販機が缶を差し出す奇跡に出会う
暖かい日の温かさブロックに腰掛け飲んだぬるいカフェオレ
偶然が重なる台本弟に探し出されるドラマが始まる
お隣の姉と弟見当たらず元気でいてねとメモを挟んだ
信号が瞬くことを止めている フェイクの消えた街中を走る
町並みに立ち上がれない家もあり残った実家の強き足腰
（そしてまたはち切れそうでターコイズブルーの石を撫で続けている）

梅

廣珍堂

わづかなる花の匂ひの流れ来ぬ北野天満宮の裏路地
襟元に白梅の匂ひ染めしひとは風に向かひてふふと笑ひぬ
太宰府の風を遠くに聞きたるか京の紅梅一斉に揺る
巫女たちの梅の実を摘みしづかなるマスクの下の薄紅思ふ
拝殿に梅の匂ひを飾りたる巫女の舞より風の声聞く
松・竹の味知らぬまま生きていく今日も弁当(梅)を頼みて
真つ白な茶碗の白湯に沈みゆく梅干が呼ぶ春もあるべし
暖流へ沈みゆきたる梅の花水底に着けば季節巡りぬ

河合隼雄のファンです

笛地静恵

選ばれて隼は飛ぶいさなとり東の果ての暗き島へと
しるがねのフルートの穴くちびるへ夢の記の明恵と出会い
ホテルふるわせノモンハンしきしまの古き井戸へと下りて行く
たらちねのあめのうずめの顔うずめ破岩一笑大牟田雄三
われわれの無とは虚無にはあらざらんあとに残るはウグイスの歌
たったひとつ持って行けるものあらたまの名前つければたましいか
そのひとがそこにいるゆえいやされし人びとの群れ今へつながら
ひひひとひぐらしぞ鳴くひさかたの光りのときにひとりめざめよ

ジャンクシオン

福山桃歌

「好き」「嫌い」しかないだろう真夜中に「どちらともいえない」って言うよな
マシュマロのかるさともろさ 大切にしたいものからココアに溶かす
ふっくらとやわらかな耳たぶにキスこのままピアスになってもいいな
刻み込むみたいに熱を移し合い息ができなくなつて 溺水
あたたかいオーブンの中ふくらんではじめてしばむ もう泣かないで
あと少しだけって思う 甘やかな瞳がとろり眠りきるまで
終わること離れることを飲み込んであやすみたい背中を撫でて
やさしさはこころを殺すゆるい毒だったから 振り返らない朝

量産型

まさけ

量産化された艶めく女らの泉のような飲み屋にはまる
量産が容易な愛をつなぐため今夜も入れてしまおうドンペリ
量産をしてはいけない夜二人赤信号を無邪気に渡る
量産を望むが金が枯渇して彼女の死海めいた眼差し
量産の果てに溜まった借金が一点ものの家庭を壊す
量産型ダメ男の俺が量産をしてる土下座で更けていく夜
量産は決してできない良妻の「わかったから」で射し込む朝日
量産を安易にされた今日どう？に今日はいいやと呟く夕べ

こころは遊びの共和国だそうです

御糸さち

室内遊戯施設の数かぎりなきプラレールたった一日の遊び友達
曲線レール八つ繋げば円になり丸ノ内線回り続ける
名鉄も阪急もよく知らんけどきみが幸せならOKです
プラレールとつちらかつてたのしいね虚空を滑るのぞみの車輪
まあそんな気はしていたよプラレールコーナーに拘束されながら
トランポリン、ボールプールのすべり台、トンネル、さようなら、さようなら
「だったら家で良かったじゃん」は禁句です× 直線レールどんどん伸ばせ
はやぶさこまち連結されていつの日かきみの夢から消えるプラレール

箱根にて

深影コトハ

二十年変わらぬ呼び名 冬の日ジェラート一匙ずつ分け合つて
友とゆく大涌谷のロープウェイ三十路の地獄はこんなに明るい
生き様を剣士のように誓い合うシューズンオフの薔薇庭園で
一人寝て二人で向かう露天風呂 奇数で行動できるんだね もう
雨の降る彫刻の森でぼつ、ぼつと弱音のようなことも話した
一字空けのような余白 フレンチの皿にも婚約の知らせにも
それぞれに土産を選ば箱根湯本 妻や娘の顔になりつつ
自撮り棒なんて持たない私たちの手振れと横顔ばかりの写真

朝靄の楽章

水也

橙の雲に覆われ隠れてく空のはしっこまだ見ていたい
夢を見ているだけ永遠に春が終わらなければと波はうたう
せんせいにどうぞと言われ葡萄酒をフリルの花に染みわたらせて
目を飲んだ夜が明けないことを祈るつめたい水に浮かんでいたい
ひたすらに駆け抜けていく風のようにあしもとは海見向きもしない
こねこの目夜の隨に星屑のかげらを拾い集めているよ
呟いた泡が歌ってくれるからいつまでだつて存在してる
水面より眠る愛しきオフィリアまひるの月を眺めていたい

船用航海日誌

宮本響

見せかけの青で深さは測れない他人の海に膝まで浸かる
底のない思考の海に沈む時あなたの声が陸地へ戻す
バスタブに下ろした栓がアンカーのようで「湯船」と小さく呼べり
眠らずにあなたのために火を焚べる灯台守になりたかった
こうかいは朽ち果てるまで続いてく我が身が船であることを知る
旅という字をカタカナで書いた時旅の終わりは死だと気づいた
終えた日の海、果てしなくこうかいは続く港を過ぎてても続く
もう増えることない花と見届けるあなたの長い旅の完成

やさしいプリキユア

深山睦美

コンビニで流れる嫌なCMをでたらめに吹き替えるプリキユア
『ブーメラン・焚き火について学ぶなら！ 焚火ブーメラン専門学校！』
プリキユアが駅のホームを歩いている鳩がつついたゲロを跨いで
洋上の給油までならプリキユアも協力できる、そう決まった日
こんなときプリキユアが来ておかしいよ！怒鳴るなんてと言ってくれたら
こんなときプリキユアが来ておいしいね、パフェ甘いねと言ってくれたら
こんなときプリキユアが来て特快を西荻窪に停めてくれたら
プリキユアがホームの端へ歩き出す鳩がつついたゲロを踏みつけ

悪評

虫武一俊

誰が誰に冷かろうが一月を並ぶ木々みな冬に明るい
三角の窓よりはずれ落ちていく陽のあつてここを愁嘆と呼ぶ
陰に影を吐くような日を繰り返し呪詛くらぐらとおれをくぐもる
暴力とこれから親しむわれわれに木々、信号機、その肉を晒す
ホームランボール吸われるビジターのスタンドほどに息をこらした
魔球なし ただ足もとに風が過ぎ一瞬土ぼこりの巻きあがる
誰にでもある絶望はたやすくそれゆえに何度もあらわれる
ネットでは悪評ばかりのジャケットを半額で買う二月の終わり